

スペシャルコレクション担当の2つの使命 - 資料保存と活用に見るSDGs -

たけうち みき
竹内 美樹

(三田メディアセンター)

やまだ まや
山田 摩耶

(三田メディアセンター主任)

1 はじめに

三田メディアセンターのスペシャルコレクション担当（以下、スペコレ担当）は同センターの膨大な蔵書の内、貴重書とアーカイブ資料を管理している。貴重書はもちろん、原稿、写真、遺品や記録類など一点物のアーカイブ資料は文化遺産と考えられる。それらを保存し、資料の状態を維持することは現在と未来の利用者の教育・研究に役立てることにつながる。ただ、本は誰かに読まれるために生まれたのであるから、素晴らしい資料を集めても死蔵するだけでは意味がない。保存するだけでなく、それと同時に現在の利用者のために閲覧や展示に供することも重要な使命である。つまり相反する2つの役割を持つ。本稿では「保存」と「利用」という2つの側面とSDGsとの関わりについて紹介したい。3～5章では、関連するSDGsの目標は本文中に【 】で示していく。

2 資料の種類

スペコレ担当が管理する資料は、貴重書、マニュスクリプト（写本・原稿）、アーカイブ資料（文書・記録・遺品などの現物資料）を包括したものが対象である。どのような資料を貴重書やアーカイブ資料として扱うかは、原則として以下の基準に従う。

＜貴重書の基準＞（※ごく簡略に表現した尺度）

- ・和書：1600年代前半（元和）より前の資料
- ・洋書：1700年より前の資料

＜アーカイブ資料の基準＞

- ・原稿、写真、一次資料（史料）・現物資料など。1点ごとの詳細な目録は作成せず、コレクション単位で管理する資料群

3 保存すること：資料へのダメージと対策

資料が劣化していくには主に3つの要因がある。

内容と各々の対策についてSDGsの関わりを見ていきたい。

■物理的要因■

＜不用意な取り扱いによる破損＞

この要素は人災に近い。ページを乱暴にめくり、本を下敷きにして字を書くなどの行為は言語道断だが、閲覧時に鉛筆以外の筆記用具は使用禁止というのは意外だろうか。ボールペンの先が資料に触れてインクが付いてしまったら、もう消すことはできないのである。腕時計やブレスレット、ネックストラップ、金属製メガネなども資料を傷つける可能性を持つ危険な存在である。必要以上に力を入れて本を開くことも背表紙やノドの破損につながる。

対策として、閲覧予約者には「貴重書を閲覧するにあたって」という文書を事前に配布し、鉛筆のみを使用する点、腕時計や手元のアクセサリを外すなどの点も含めて指導している。また貴重書活用授業では教員が講義を始める前に、資料の取り扱い方や注意事項を口頭でも伝える。古い資料に初めて触れる学生はもちろん、教員や図書館スタッフでも取り扱いに不慣れな場合があるので、資料の劣化を少しでも防ぐために、書物との接し方について日々アピールをする必要がある。

＜汚れ＞

資料を扱う際に手袋は使用しない。素手でそっと触れる方が、繊細な紙が破れてしまわないよう、微妙な危険性の有無を常に感じる事ができるからである。ただ、手指の油分やヨゴレは排除しておかないと資料の劣化が進むため、資料に触る前後には必ず手を洗い、清潔な状態で扱う。事前のみならず事後にも洗うのは、当人の健康被害を予防するためである。

■化学的要因■

＜温湿度による劣化＞

冬の乾燥で人間の肌がかさつくのと同様、革装の

洋書も低湿度環境では乾燥して傷む。一方、季節を問わず湿度80%、温度28度以上になるとカビが発生する。資料にとっては湿度50%前後、温度20度前後が良好な環境で、年間を通してそれを維持するために書庫では24時間エアコンを稼働させている。

＜紫外線による劣化＞

紫外線は本の大敵である。少しでも日に当たると黄ばんでしまう。そのため書庫に窓はなく、貴重書を閲覧する部屋では遮光カーテンを常に閉じ、外光を入れることはない。

＜クリップ、ピン、セロテープ、ラベルなどによる劣化＞

クリップで綴じられた資料は錆で変色するのみならず、紙が劣化して穴が開いてしまう。過去に補修のつもりで貼られたセロテープもそれ自体が傷んで資料にダメージを与える。クリップやテープ類はアーカイブ資料を整理しているとよく見つかる。テープは無理に剥がすと本体を傷める可能性があるため、劣化して自然に剥落するのを待たざるを得ない。クリップについては錆びていなくてもすぐに外す。他機関ではクリップの跡を紙縫りで綴じ直す場合もあるようだが、スペコレ担当ではクリップでまとめられていた塊ごと中性紙封筒に入れて保管している。【SDGs12：つくる責任 つかう責任：環境に優しい物品の使用】

■生物的要因■

＜カビ・害虫＞

カビも本の大敵である。古い資料には黒くなったカビの跡がついていることがあるが、生きている様子が見られなければ通常の閲覧が可能。万が一、生きたカビを発見した場合はビニール袋で直ちに密閉し、他資料にカビ孢子が飛ばないように隔離する。害虫対策としては、継続的なトラップ調査を行っている。アーカイブ室、保存庫などスペコレ担当が管理する資料がある書庫の四隅に、誘引剤のない粘着トラップを設置し、春から秋は2週間に1度、冬は1か月に1度チェックする。そこにかかった虫を、1mm以下の微細なものから大きなものまで種類別に数え、記録する。薬剤を使って虫をゼロにすることは生態系を狂わせることにもつながるので、一定の範囲内であれば日々の監視で管理するが、異常な増殖を見せた場合は専門業者に相談するなどの対策が必要となる。【SDGs15：陸の豊かさを守ろう：生

態系の保護】

カビ・害虫の対策には養分となるものを除去する意味で、掃除が有効である。書庫内は定期清掃に加え、1週間かけて書架と資料外側も拭く特別清掃を株式会社フミテックに依頼して年1回実施している。書庫内の塵埃の状況など細かなレポートを同社が作成。環境管理についてのアドバイスも受ける。【SDGs17：パートナーシップで目標を達成しよう】

また、虫がいる可能性がある資料には、冷凍処理を計画的に実施している。虫の卵まで駆除するためにはマイナス45度で1週間冷凍する必要がある。夏には電力が逼迫する可能性があり、気温が低い方が冷凍の効果も高いため、主に冬季に実施している。

4 そのままの状態を維持するために：保存材

スペコレ担当では原裝保存を原則とし、資料の補修は行わない。和漢書はもともと帙に挟んで保管しているので、綴じ糸が切れていても丁寧に扱えば特に問題はない。洋書の中には表紙が外れたり、羊皮紙が経年で反ってきたりするものがある。そのような場合には対処が必要だが、資料自体の原形は変えず、元に戻す方法を選ぶことが鉄則である。代表的な例としては、資料の縦横高さを計測し、本体にフィットさせるオーダーメイドの中性紙箱が挙げられる。出来合いの箱も存在はするが、きつすぎたりゆるすぎたりすると資料自体に負担がかかるため、貴重書や形態が特殊な資料については特注している。株式会社資料保存器材やナカバヤシ株式会社には資料の形態と保存方法の希望を伝え、ニーズに合った収納箱を提案してもらう事も多い。【SDGs17：パートナーシップで目標を達成しよう】



図1 箱に詰まっていた泉鏡花遺品のウサギおもちゃ



図2 泉鏡花遺品のうさぎおもちを個別に保管

一枚物の資料の保存には、クリアファイルのような形状のアーカイバルクリアフォルダを使用している。中世の装飾写本の零葉、未整理状態でくしゃくしゃのまま長年置かれていた図面類などに用いる。透明シート越しに中が見えるため、資料を傷めず両面を閲覧することができる。このファイルにはガス吸着シートが封入されている。紙から発生するガスによるその資料自身の劣化を遅らせるためのシートで、立体資料をくるんで箱に保管する際にも使用する。効果を持続させるために、時々交換する必要がある。



図3 帝国劇場のポスターを収納した例

請求記号やBook-IDは本体に貼らず、中性紙の葉に貼付して挟む（または箱の中に一緒に入れる）。でんぶん糊とは異なる化学的な成分の接着剤が資料を傷めるのを避けるためだ。また、展示する場合にラベルが貼ってあると姿かたちが台無しになる。美

術的要素を持つ資料の場合はそれ自体の価値が損なわれる可能性もあるため、この点は非常に重要といえる。【SDGs12：つくる責任 つかう責任：環境に優しい物品の使用】

5 保存の先にあるもの

繰り返しになるが、スペコレ担当では資料の補修を原則として行わず、破損した状態のものであってもそれ以上悪化させないように維持を心掛けている。貴重書やアーカイブ資料は文化財である。元の状態を変えるような補修をすることで、その本が背負った歴史を消すようなことがあってはならない。本は人間よりも長生きであり、適切に管理すれば、何世紀も生きることができるだろう。利用者の目に触れ、現在や未来の研究者（学生）の興味、探求心を掘り起こすこともその本の役割の一つと考えられる。【SDGs 4：質の高い教育をみんなに】

6 スペシャルコレクションのアウトリーチ活動とSDGs

スペコレ担当にとって、この世に縁があり残されてきた文化財である資料を、ただ保存していただくだけではなく、それらを研究・学習のために活用させることも重要な役割である。貴重書もアーカイブ資料も、ともに開架書庫にはない資料で利用者に認知されにくいいため、利用促進のための試みを積極的に行なっている¹⁾。

本稿後半では、スペコレ担当で行なっているアウトリーチ活動とSDGsとの関連について紹介したい。7～9章の各章の始めに、関連するSDGsの目標を示していく。

7 展示会による資料活用

貴重書を広く見てもらう直接的な方法として、館内や学外ギャラリーを使用した各種展示会を企画、開催している。館内展示は大正期から、学外ギャラリーでの貴重書展示会は1985年からと、どちらも長い歴史を持つ代表的なアウトリーチ活動である。また学内者だけではなく広く一般にも楽しんでもらうための運用も実施しており、SDGsの目標11（住み続けられるまちづくりを）や目標4（質の高い教育をみんなに）、目標17（パートナーシップで目標を達成しよう）などと大きく関連している。

(1) 館内企画展示

三田メディアセンターでは、スペコレ担当以外の各部署からも構成される展示委員会により、図書館1階展示室を使った展示会を企画、開催している。

展示室自体は館内にあるが、本学所属者だけでなく、学外者も入館し無料で観覧することができる。大学のオープンキャンパスの時期には主な来館者である高校生が楽しめるように、教科書に掲載される貴重書を展示するなど、学内行事に合わせたテーマを取り扱ったり、本学が所蔵する貴重書のひとつ、グーテンベルク聖書原本を学生が在籍中に一度は目にすることができるよう、3～4年に1回展示するなど、広く来館者に楽しんでもらえるよう工夫している。

また、展示資料の撮影も許可（ただしフラッシュは不可）しており、展示の楽しみ方にも柔軟に対応している。来館者が撮影画像をソーシャルメディアに投稿することで、展示の認知度が上がり、さらなる集客につながる場合もある。

その他、展示委員会主催のみならず、教員や学部専攻、学内の他の研究機関からの持ち込み企画の展示も開催し、展示委員会が設営、広報のサポートも行なっている。

(2) 慶應義塾図書館貴重書展示会

2005年以降、丸善丸の内本店内のギャラリーにて、本学教員による監修のもと貴重書展示会を毎年開催している²⁾。

JR東京駅隣接の非常に立地の良い会場を使うことで、学内者だけでなく幅広い層の来場者が見込める。慶應義塾が所蔵する文化遺産を広く知ってもらえる、またとない貴重な機会と言えよう。約1年の準備期間をかけて外部団体と協力し、複数回の企画会議を経て実現させている。会場提供や広報、設営、運営面でサポートしていただいている丸善雄松堂株式会社はじめ、図録制作に関わる昭和情報プロセス株式会社、広報物作成の東京速水印刷会社、資料撮影専門の株式会社カロワークスなど各企業とのパートナーシップなくしては実現しない規模の大きい展示である。

また、展示だけではなく、監修者によるギャラリートークや講演会などの催しも企画・開催している。来場できない方のためにそれらの動画を撮影し、会期後にYouTube上で配信している。

(3) 他機関の展覧会への資料出品

上記のような、三田メディアセンターが主催する展示だけではなく、学内の展示機関であるKeMCo（慶應義塾ミュージアム・コモンズ）や慶應義塾史展示館、学外の美術館、博物館で開催される展覧会にも貴重書を出品している。

貴重資料のため、貸出資料の事前調査の段階から、先方の学芸員と綿密に連絡をとり、貸出日数や展示方法、会場の防災防犯対策、保険有無の確認を行なった上で、出品可否を判断してから貸出を行う。その一連の業務の中で、学芸員から資料についての学術的な知見や展示技術についての具体的な情報を得ることもあり、出品の機会を通じて資料の理解を深め、自館の展示業務にも役立てている。石川県金沢市にある泉鏡花記念館は、泉鏡花の遺品を多数所蔵していることから、過去にも度々展覧会にこちらから出品している機関の一つだが、同記念館の学芸員から本学が所蔵する泉鏡花の数多くの未整理状態の遺品について、遺品のもつ背景や、整理についてのアイデアをご教示いただき、双方の機関でそれぞれ所蔵する遺品について理解を深めている。

8 デジタル化した貴重書の利用促進

展示会や貴重書室に来館できない国内外の研究者のために、資料のデジタル化を積極的に進め、複数のWebサイトに画像を提供している。これは同時に、閲覧行為による資料の物理的な劣化を防ぐことにもつながっている。SDGsの目標11（住み続けられるまちづくりを）や目標4（質の高い教育をみんなに）、目標17（パートナーシップで目標を達成しよう）、目標12（つくる責任、つかう責任）と大きく関連している。

(1) メディアセンターデジタルコレクション³⁾

慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション（以下、「デジコレ」）は、本学メディアセンターで所蔵する貴重書、アーカイブ資料の特殊コレクションを高精細画像で公開しているサイトである。国際的な画像データの相互利用規格であるIIIFにも対応させたシステムを使用し、画像ファイルのほか、一部資料についてはPDFファイルも公開し、テキスト検索ができるようにしている^{4) 5)}。

スペコレ担当業務の大きな柱に、外部からの画像

掲載依頼への対応があるが、デジコレへの公開をきっかけに、雑誌論文やテレビ放映での画像使用申請が年々増加している。画像利用の需要の高さを知るとともに、今後も継続的なデジタル化の必要性を感じている。

(2) Keio Object Hub

Keio Object Hubは、KeMCoのプロジェクトにより2021年に開設された画像ポータルサイトで、学内で所蔵する文化財がオンラインで公開されている⁶⁾。

デジコレで提供しているメディアセンター所蔵資料の画像も、学内他機関で所蔵する文化財の画像と横断検索され、さらなる資料の利用促進につながっている。

(3) PRL (Pacific Rim Library)

PRLは、PRRLA (Pacific Rim Research Libraries Alliance) が実施するプロジェクトで、環太平洋地域の大学が所有するデジタル画像を集め、公開するサービスである。メディアセンターが2020年にPRRLAに加盟したことで、デジコレのデータ連携が開始され、海外からもPRLのプラットフォームを通じて本学の貴重書画像を活用することができるようになった⁴⁾。

(4) Google Arts & Culture⁷⁾

2019年よりGoogle社が提供する非営利プラットフォームGoogle Arts & Culture (以下、GAC) に、メディアセンターは日本の大学図書館として初めて参加した。GACには貴重書コレクションの一つである「ボン浮世絵コレクション」(明治期浮世絵コレクション) より約500点以上の画像を掲載している。同時にそれらの画像を使って、「日本の食文化」や「マンガ」を切り口としたテーマで、プロジェクトの担当者が自由に展示を組み立てたオンライン展示を公開している。GACに加盟している、世界中の美術館、博物館が作成したオンライン展示ともリンクされているため、Google上で、同じテーマの展示を機関横断的に鑑賞することができる。



図4 Google Arts & Culture展示

9 授業、ワークショップでの貴重書活用

個別の研究者への資料閲覧に伴う研究支援のみならず、学生や学外研究者に向けての研究・教育支援の一環として、「貴重書活用授業」や「ワークショップ」の場で貴重書を提供している。展示やWeb上でのデジタル資料の提供と比較すると、限定的な活用方法ではあるが、大学図書館が持つ使命を果たすための重要なサービスの一つと言える。また、教員と密に連携を組むため、SDGsの目標4(質の高い教育をみんなに)や目標17(パートナーシップで目標を達成しよう)と関連づけられる。

(1) 貴重書活用授業

教員が貴重書を使って学生に講義する授業で、従来から行っている学習支援サービスの一つである。「貴重書活用授業」という名称は2014年後期から使用)

貴重書室の閲覧席を授業時間に開放し、10点近くの貴重書を並べて講義していただくというもので、新人教員や研究室へのチラシ配布などでプロモーションを図ったこともあり、最近では申請件数も多く、また授業内容もバリエーションに富んだものが増えてきている。大半は、教員が事前を選択した貴重書について、それぞれ資料解説を行うスタイルだが、中には貴重書のテキストを学生とともに輪読する授業や、貴重書を使った発表を最終課題とし、受講生が選んだ貴重書について事前に調査し解説するといった、教員からの一方的な説明ではなく、双方で貴重書を使って資料についての理解を深めていくような授業のスタイルも見受けられる。



図5 貴重書活用授業

(2) ワークショップ、学会での貴重書提供

授業以外でも、学内研究者主催のワークショップや学内開催の学会に関連して、館内の会場で貴重書を提供し、学会に所属する学内外の研究者に活用してもらっている。最近では、海外からの訪問研究者による貴重書を使ったワークショップで、学会所属者や学内研究者対象に、当館が所蔵する西洋写本を50点ほど提供した(図6)。また英国のThe Open Universityにより設立された、オンライン教育プラットフォームFutureLearnのワークショップでは、国文学、英文学専攻の教員の依頼により、奈良絵本の屏風や古活字本をはじめとした日本の古典籍や、インキュナブラの洋書や西洋写本を提供した。英国からも研究者が参加し、資料を実際に目にする機会を学内だけでなく学外の研究者にも広げている。



図6 ワークショップ

10 スペシャルコレクションの資料運用の未来

以上、スペコレ担当で行なっている様々なアウトリーチ活動について紹介したが、このような活動が

できるのも、現在までに遺された唯一無二の貴重書、アーカイブ資料の的確な保存があってこそである。

貴重書やアーカイブ資料は、資料の持つ歴史や希少性から、保存方法や提供方法も一元化しにくい性質がある。それゆえ、個々の資料に合わせた細やかな管理が欠かせず、また可能な範囲で学内外の利用者のニーズに対応した資料提供が必要と考える。

後世の研究者にも資料を引き継いでいけるように、引き続き「保存」と「活用」のどちらの両輪も止めることなく、今後も貴重書を使ったより良い社会貢献を目指し、多様なサービスを模索し展開させていきたい。

参考文献

[第1～5章]

小島浩之. 特集, 資料保存: 図書館資料保存試論. 薬学図書館. 2013, vol. 58, no. 4, p. 258-266.

関根博之. 特集, 資料保存: ナカバヤシにおける資料保存サービス. 薬学図書館. 2013, vol. 58, no. 4, p. 275-279.

木部徹. “表紙は外れたままでよい—貴重書の修復と資料保存—”. スタッフのチカラ. 1990.

https://www.hozon.co.jp/report/post_8842.

設楽舞. 資料保存における修補の位置付け—東京大学経済学部資料室の活動から—, 東京大学経済学部資料室年報. 2013, vol. 3, p. 68-74.

[第6～10章]

1) 倉持隆. 貴重書, アーカイブ資料から「スペシャルコレクション」へ. MediaNet. 2014, no. 21, p. 24-25.

2) 倉持隆. 慶應義塾図書館貴重書展示会 第30回を迎えて. MediaNet. 2018, no. 25, p. 34-38. ほか, MediaNet各号に掲載される貴重書展示会記事

3) 慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション. <https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja>.

4) 稲木竜. 慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション—公開からこれまでの歩み—. MediaNet. 2022, no. 29, p. 50-54.

5) 倉持隆. 貴重書業務とデジタル化の展開. MediaNet. 2007, no. 14, p. 26-28.

6) Keio Object Hub.

<https://objecthub.keio.ac.jp/ja>.

7) Google Arts & Culture.

<https://artsandculture.google.com/partner/keio-university?hl=ja>.